





コロナとの闘いで見えた 日本の課題

期日 / 場所	講座タイトル	講師
1月29日(土) 12:30-14:30 市民交流センター 第2・3・4会議室	第1回 ■ 日本のコロナ対策の功罪と課題 -ウイルスの病(やまい)から社会の病(やまい)へ-	川崎市健康安全研究所 所長  岡部 信彦氏
2月5日(土) 12:30-14:30 同上	第2回 ■ コロナ下における変貌する格差社会 -増大する若者の生活不安定化のリスク-	国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部 室長  西村 幸満氏
2月12日(土) 12:30-14:30 同上	第3回 ■ 医療逼迫はなぜおきたのか -次なる感染症に備える-	朝日新聞 編集委員  辻 外記子氏
2月19日(土) 12:30-14:30 同上	第4回 ■ コロナ禍の教訓と逗子のこれから -思い込みと事実を見分ける方法とは?-	(株)日本総合研究所 主席研究員  藻谷 浩介氏

申し込み方法・問い合わせ先

受付期間 : ~1月15日(土)まで 定員 : 60人(定員を超えた場合は抽選)
 申込方法 : ①講座名:「コロナとの闘いで見えた日本の課題」(選択希望講座あれば第1-4回を備考欄に)
 ②〒・住所 ③氏名 ④電話番号/FAX をご記入の上、はがき・FAX・メール・ホームページ
 及び来館頂き、ずし楽習塾ポストへ所定申し込用紙にご記入の上投入願います。

受講料 : 無料

申込み先 : 〒249-0006 逗子市逗子 4-2-11 市民交流センター 気付

NPO法人ずし楽習塾推進の会

Eメール z-gakushujuku@bz04.plala.or.jp ホームページ URL <http://zushigakushu.jp/>

問合せ先 : TEL/FAX 046-871-7007

※ 電話での受付はいたしません。



「コロナとの闘いで見えた日本の課題」

各講座要旨ご案内

期 日	講座タイトル&要旨	講 師								
1月29日 (土) 	第1回 日本のコロナ対策の功罪と課題 ーウイルスの病から社会の病へー	川崎市健康安全研究所 所長 岡部 信彦氏								
2月5日 (土)  <p>自分が下流と感じている層はジュニア</p> <table border="1"><thead><tr><th>年</th><th>人数</th></tr></thead><tbody><tr><td>1994年</td><td>28,700</td></tr><tr><td>1999年</td><td>34,450</td></tr><tr><td>2014年</td><td>39,000</td></tr></tbody></table> <p>格差社会で下流と感じる人はどんどん増えている</p>	年	人数	1994年	28,700	1999年	34,450	2014年	39,000	第2回 コロナ下における変貌する格差社会 ー増大する若者の生活不安定化のリスクー	国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部 室長 西村 幸満氏
年	人数									
1994年	28,700									
1999年	34,450									
2014年	39,000									
2月12日 (土) 	第3回 医療逼迫はなぜおきたのか ー次なる感染症に備えるー	朝日新聞 編集委員 辻 外記子氏								
2月19日 (土) 	第4回 コロナ禍の教訓と逗子のこれから ー思い込みと事実を見分ける方法とは？ー	(株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷 浩介氏								

2019年12月中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、現代の人と物の動きの大きさ速さによって、瞬く間に世界に拡散した。拡大につれて「人の病」だけではなく政治、経済、国際社会の混沌を巻き込んだ「社会の病」となり複雑化し、様々な分野からの処方箋が必要とされている。しかし基本は「人の病」であり、この観点から社会の病となった新型コロナウイルス感染症を述べてみたい。

2000年代までの経済的な不平等の拡大は、高齢者の経済的格差が主な理由であった。すなわち人口の高齢化によるところが大きかった。同時に、それまで経済的格差が小さかった若者の間の格差が明らかになった。2017年に実施した調査をもとに、就職氷河期世代（36-45歳）以降の若者（20-35歳）の実態を提示し、将来のリスクについて解説する。

新型コロナウイルス感染症が流行し、病院に入院できず、自宅で患者が亡くなる。そんな事態が2021年の始めと春、そして夏、一部の地域で繰り返し起きた。ベッド数は感染のスピードに追いつかず、対応できる医療スタッフの数は十分でなかった。課題を整理するとともに、次なるパンデミックに備えてできること、改善すべき点についてもお話したいと思います。

2年前、「コロナが世界を変える」と騒がれた中、講師（藻谷氏）は「コロナでは日本は変わらない」と予想していました（20年7月刊 岩波新書「コロナ後の世界を生きる 私たちの提言」寄稿）。実際にはどうなったでしょうか。 コロナ禍とは日本にとって何だったのか、改めて明らかになった逗子の課題は何か、客観的に総括・提示します。